



桜蓮祭を終えて

第11回桜蓮祭実行委員会 鈴木 雄基

昨年は桜蓮祭開催10周年を迎え、多くの方にご来場いただきました。15周年、20周年に向かう新たなスタートを切るために、今年度は「Smile with you～君と地域と新たな一歩～」をテーマに掲げて行いました。来場者の方々と学生の間で笑顔を共有し、文字通り地域と新たな一歩を踏み出せたことを、とても嬉しく思っています。

今年度も新潟県立看護大学後援会様、地域のスポンサーの方々にご支援を賜りました。毎年桜蓮祭を開催できるのは、皆様のご協力のおかげです。学生を代表してお礼申し上げます。地域企業の方々にスポンサー協力をお願いをする際、「今年はどんな企画をするの?」「当日楽しみにしているね」と応援の言葉をたくさんいただきました。開催を楽しみにしてくださっている方々の期待に応えられるよう、学生一丸となって準備を進めてきました。当日はあいにくの天気でしたが、昨年同様、お子さまから高齢の方まで幅広い年齢層の方々にご来場いただき、多くの方々に私たち学生の姿を見ていただくことができました。

今年度はハカレンジャー(健康測定)に加え、災害看護サークルによる新たな企画が誕生し、来場者の方々に大変ご好評いただきました。新潟県唯一の看護を専門とする大学として、桜蓮祭は私たちが学んでいる看護について知っていただく貴重な機会です。これからも看護大学ならではの企画を地域の方々に届けていきたいと考えています。

開催を重ねることで、桜蓮祭の存在を地域の方々に広く知っていただけているようです。知っていただき、来場していただくためには何をすればよいか。また来たいと感じていただくためにはどうしたら

よいか。私は「時・場所・人」を大切にすることが重要だと考えています。来場していただいた方々と学生の間で流れる時間は、その時しか味わうことができません。高田の美しい桜と蓮から名付けられた桜蓮祭は、学生と地域の方々をつなぐ大切な場です。そして、その時出会う方々は私たちが日ごろから支えてくださっている人たちです。一日という短い開催期間ではありますが、時・場所・人を大切に、今後もかけがえのない思い出を残せる素晴らしい桜蓮祭にしていきたいと考えています。来年度の桜蓮祭にもぜひご期待ください。



もくじ

- | | | | |
|-------------|------------|------------------|---------|
| 1 桜蓮祭を終えて | 3 公開講座 | 5 実習を終えて | 8 卒業生は今 |
| 2 絵画の寄贈について | 4 新教員紹介 | 6 メディカルグリーンツーリズム | 研究報告 |
| 3 民謡流し | ふれあい実習について | ゼミ紹介 | 編集後記 |
| オープンキャンパス | ふれあい実習を終えて | 7 卒業研究 | |
| | 5 9月29日発表会 | サークル紹介 | |



絵画寄贈について—川合清先生と私

学長 渡邊 隆



絵画寄贈 (右:川合清画伯夫人)



絵画寄贈



女と葉鶏頭(川合 清)



華(川合 清)

川合清先生とは、私が上越教育大学に赴任してきた昭和57年から、ずっとお付き合いさせていただきましました。あのころ、まだ若かった私は、毎晩のように近くの酒場：「若杉」で夕食をすませていました。そこに、きまって夕方6時過ぎるとやってきて、いつも隅のきまった席に陣取っている白髪の教授がおりました。その先生が川合先生であることを知ったのは、かなり後のことでした。とにかく静かに酒を呑み、にこやかに物を語りかける、実にスマートな紳士でした。学内でお会いすることがあり、はじめて日本画の大家、川合清先生と知ったのでした。

毎晩、一緒に呑むようになり、一晩中語り合う日々が、それから続いたのは、ごく自然でした。まず、話がおもしろい。若者に期待をし、話しかけてくれる。大学の将来を語ったり、日本画の世界に引き込んでくれたり、毎日、あっという間に、翌日になってしまうのでした。今考えれば、あの時先生は、すでに65才を過ぎていたのではなかったかと驚いています。

川合先生は、東京芸術大学(旧東京美術学校)を卒業後、日本画院展にて、奨励賞を受け、母校の助教授となり、その後も数々の賞を受けておられます。そのうち、新潟大学教育学部助教授、教授を歴任され、新しく完成された上越教育大学学校教育学部の教授を務め、昭和62年3月に上越教育大学を退官されています。上越教育大学の名誉教授であり、平成2年には、教育と日本画の世界での業績が認められ、勲三等旭日中授章を受章されております。

退官後も、ご家族の皆様ともお付き合いをさせていただいておりましたが、残念ながら平成20年に90才で、ご逝去されてしまいました。

一昨年の秋ごろ、奥様から大学へ絵を寄贈したい旨のお電話をいただきました。「是非、看護師をめざす若い方にみていただきたい作品がある」とのことでした。さっそく友人で洋画家の増谷直樹氏に相談したところ、「いい話だから、うけたらどうか」ということになり、一昨年の12月にお宅にお邪魔しました。絵を見せていただいたのが、「華」という150号に近い大作でした。あわせて「女と葉鶏頭」も寄贈下さることになり、2012年の6月に本学メインロビーにこの二作品を飾ることができたのです。二つとも若さとそのエネルギーにあふれたもので、若者の将来の可能性を高らかにうたっている作品であります。

川合先生のご家族の方々への厚いご支援に感謝いたしております。大学の学生、教職員の皆様には、末長く、これら二作品を鑑賞する喜びを幸せに感じながら大学生活を楽しんでいただければと願っております。



7月5日に、2年生が、先輩から看護の灯を受け継ぐ継燈式を行い、看護者としての誓いを新たにしました。初めての患者様を受け持つ基礎看護学実習を前にして、学生達はやや緊張しながらも、実習病院の方々や教職員からの暖かい励ましを受け、看護者の一員となった喜びにあふれていました。



7月25日「高田祇園祭」の民謡流しに、学生40名、教員12名の計52名が参加しました。初めて民謡流しに参加する人もいましたが、優しい先輩達から教えてもらいながら、色とりどりの浴衣姿で楽しく踊ることができました。また、「看護大!」と声を挙げながら、元気いっぱいの踊りを見せ、地域の皆様から暖かな声援を頂きました。



民謡流し

オープンキャンパス



8月1日、24日にオープンキャンパスが行われ、県内・県外から併せて347名の方々が参加されました。学長室訪問では、「普段なかなかお話しする機会が少ない学長さんとお話しできて親しみがあった。」「より看護師になりたい気持ちが高まった。」との声が聞

られました。また、在校生との懇談では、「実際の学生さんの声を聞くことで、学生生活を楽しんでいることが伝わってきた。」等、直接話を聞くことで、学生生活に対する期待を更に強くしているようでした。その他にも、模擬講義や各領域による体験学習では、様々な体験が行われ、充実した時間を過ごすことができました。

11月29日に、淀川キリスト教病院 がん診療センター主任看護課長の田村恵子先生より「いのちと向き合う看護～スピリチュアルケアの視点から～」というテーマで公開講座が行われました。NHKの「プロフェッショナル」で取り上げられたことでも有名な先生とあって、学生はもちろん看護職の方、地域の方々から参加して頂き、盛況に行われました。スピリチュアルという言葉の意味の多様性や「プロフェッショナル」の一場面を用いながら、スピリチュアルケアについて、やさしくていねいに説明して頂き、感動に包まれ終了となりました。



公開講座



新教員紹介

助教

河野 優子 (かわの ゆうこ)

10月からお世話になり、教員生活も数年となりましたが、毎日、右往左往の連続です。看護学生時代から大学病院での勤務の数年間を東京で過ごし、留学の経験を買われて東北で移植コーディネーター(以下、Co)として活動し、新潟に戻り教員をさせていただいています。

留学での体験をお話します。語学研修の目的でオーストラリアに渡り、州立病院の肝移植チームに所属するCoのもとを訪れ、研修をお願いしました。当時、日本にはない治療、脳死臓器移植、その中心で旗振りをするCoについての研修です。日本の移植医療の夜明けがすぐそこまで来ていたことなど知る由もなく、自費での貧乏生活でしたが、充実した日々だったことを思い出します。きっかけは大学病院で、海外にはCoがいると聞いたことでした。放射線科での終末期看護から、愛する人の死によって深い悲しみの中にいる家族が癒されることはないものかと考えていたこともあり、死が伴う臓器の提供者側のCoに興味がありました。

研修は、救命かなわず脳死になられた患者さんの連絡が病院から

Coに入った後、家族との面会に同席。臓器提供の承諾をいただいた後、提供希望臓器の移植適合者の決定から摘出手術の時間決定まで押し寄せてくる連絡を手際よく調整していく様を見学。提供病院へは、専用チャーター機で飛び回る摘出チームの一人として同行させてもらった。手術室では、看護師に流れを説明し、持参した特殊機材の受け渡しや外回り、提供された臓器を冷保存し、病院を後にする。手元から離すことなく、移植施設へ届けCo業務終了。夜も更けた深夜、すでに始まっている移植手術を見学し、終わりを告げる頃に昇る朝日が、ようやく迎える完結の合図のようでホッとする瞬間でした。後に臓器移植法の施行後に受けた取材で、日本で脳死臓器移植が可能になったと実感するのは?の問いに、こんな時ではないかと思うと答えた。

研修を終えるとき、初めて引き受けて無事終了を迎えたので、証明にと盾をいただきました。変わった経験を持つ変わった人間ですが、看護を志す人たちの力になれば嬉しく思います。どうぞよろしく願いいたします。



ふれあい実習について

ふれあい実習コーディネーター代表 中野 正春

ふれあい実習の目標は、地域で暮らす人々の個々の日常生活の一つに健康があるのだということとそれらの人々との交流の中で理解することです。この目標は、住民一人ひとりの健康や福祉に主体的に関わる専門職業人としての自覚を早くから学生に持ってもらうことと、今後の看護実習において、そして将来看護職者となった後に病める人々と関わっていく中で、生活者の立場になって考えることができるようになることを目指しています。

内容は2泊3日の実習と1週間後の現地での発表交流会という形になっております。実習の内容もできるだけ地域の人々と触れ合えるような内容で行っております。地域探索では、ただ自然や家並を観察するというよりも、直接お宅を訪ねて地域での生活についてお話をお聞きしたりしています。さらに高齢者のお宅を訪問したり、老人会に参加し、出し物を出して地域の人々と一緒に楽しんだりして交流を深めております。



ふれあい実習を終えて

1年生 櫻川 萌美

私たちのグループは10月9日から11日までの3日間、上越市の牧区にてふれあい実習を行いました。この実習では、「地域で暮らす人々の日常生活の成り立ちや生活の基盤となる価値について知り、生活者の視点に立って考える」とことや「地域に暮らす人々がよりよく生活するための暮らしづくりと、そこでの看護が果たす役割について理解する」ことを目標に取り組みました。その中で、地域の特性や暮らしの現状を観察し、課題を見つけ、解決の方策を考えました。

牧区に住んでいる方々のお話を聞いて、豪雪地域である牧区にとって過疎化は重大な問題であると分かりました。雪が沢山降っても若手がいないため、屋根の雪下ろしや家の周りの除雪を高齢者が行わなければならないという現実には少子高齢化が進んだ故に引き起こされた課題だと思いました。

また、医療・福祉に関連した機関が非常に少なくなっていることも分かりました。そこで必要となるのは、訪問看護の充実であると考えました。高齢者の多くはできるだけ長い時間を自宅で過ごしたいと思っているので、訪問看護・介護の需要はますます増えると思いました。

実習を終えて

一方で、近所付き合いや地域活動が盛んであることも分かりました。一人暮らしや夫婦の二人暮らしだったとしても、お茶飲みや共通の趣味での集まりは、この地区で暮らす上での生きがいになっていると感じました。このような交流が都市部よりも盛んであることが、豪雪地域で少々難があったとしても、この地域で住み続けようとする理由の一つになっていると思いました。

「ふれあい実習」を通して、一人一人に異なった生活や人生、地域性、価値観があることを実感しました。この経験から、一人の患者さんを「患者さん」として大きく捉えるのではなく、一人の人間として「その人だけ」の固有の生活や人生を尊重し、その人にとって最善の看護を提供できる看護師になりたいと思います。



9月29日
発表会平成24年度上越地域看護研究発表会
平成23年度地域課題研究発表会

9月29日の午前に平成24年度上越地域看護研究発表会、午後には平成23年度地域課題研究発表会が開催されました。上越地域看護研究発表会は上越地域の各病院や地域に所属する看護職員の看護連携を図る目的で、各機関から16題の研究発表が行われました。(参加者53名)

また、地域課題研究発表会では、新潟県内の保健・医療・福祉に携わる看護職(看護実践家)と本学教員が共同して地域の看護実践での課題解決に向けた研究を行うもので、9題の研究発表が行われました。

どちらの発表会も、地域の看護の質をより高めるために、活発な意見交換が行われました。



基礎看護学実習を終えて

2年生 近藤 悠華

私たち2年生にとって、基礎看護学実習は初めての病棟実習でした。不安や緊張、期待とともに迎えた実習でしたが、実際の看護の現場に触れることは講義や演習では得られない新鮮で貴重な体験となりました。

実習での受け持ち患者さんとの関わりを通して、患者さんを尊重した実際の看護を学び、看護は日常生活の援助であると改めて気づきました。私は今日の日付や今の時刻、天気、気温などの情報を当たり前のようになっています。視覚的に情報を得たり、気温を肌で感じたりすることができませんが、毎日同じ病室で長期間生活している患者さんにとっては困難なことです。直接的な援助だけでなく、日常生活上で必要な情報を提供することも看護師の大切な役割であると学びました。私が受け持たせていただいた患者さんは長期間の寝たきりの生活により体力の低下、治療への意欲の低下が心配されていました。口数が少ない患者さんだと聞いていましたが、特に最初のころは表情の変化やはっきりとした反応も少なく、コミュニケー

ションをとることに苦労しました。患者さんの小さな反応や変化を見逃さずに意思を尊重し、自立を手助けできるよう援助に関わりたいたと思いました。その後、カレンダーや時計を使って日時を伝えながら積極的にコミュニケーションをとることで、患者さんの表情が少しずつ豊かになり、会話が増えていく様子を感じられました。初めは緊張していた実習も、終わりに近づくにつれて患者さんの顔を見るのが楽しみになっていました。

基礎看護学実習を終えて、私の現在の知識、技術は看護の基礎であることがよくわかりました。看護師の毎日の関わり次第で患者さんの状態はよくも悪くも変化します。基礎となる知識、技術だけでなく、患者さん一人一人の状態をよく観察し、適切に判断、行動することの大切さにも気づきました。今後は領域別実習に向けて、今以上に自ら考えて行動できるように勉強、演習に励みたいと思います。



地域看護学実習を終えて

4年生 佐藤 希未佳

保健師を志し、本学に入学した私は、地域看護学実習を大変楽しみにしていました。上越市中郷区と上越保健所で、3年次の領域別実習後に開講される地域看護学演習の時と同じメンバー2人と共に実習をさせていただいたのですが、地域看護学実習を終えて、大変実りの多い実習だったと実感しています。

地域看護学実習は、地域診断実習、保健所・市町村実習、継続訪問実習で構成されます。中でも印象に残ったことは2つあります。

1つ目は、健康教育です。私のグループでは、健康増進や疾病予防に大変関心の高い方々を対象に実施させていただきました。当日までは、対象者の視点に立ってテーマや内容、時間配分、資料、ポスター、会場設営、声の大きさ・速さ等を考え、計画や準備を行ってきました。これは私が想像していた以上に大変な作業でしたが、当日は健康教育後にお褒めの言葉をたくさんいただくことができました。他方、まだまだ対象者の視点に立ちきれていないということもわかりました。今後の自分の課題として肝に銘じたいと思います。

2つ目は、信頼関係です。地域看護学実習で出会った保健師さんは、住民の皆さんだけでなく、他職種の方々からも大きな信頼が寄せられていました。これは、保健師さんの存在が皆に安心感を与えているからなのだと思います。私は、4月から保健師として働くことになりませんが、皆に安心感を与えることができる保健師になれるように日々努力していきたいと思います。

最後に、地域看護学実習では多くのことを学ぶことができました。また、自分の今後の課題や自分の理想の保健師像を明らかにすることもできました。そして、地域看護学実習を通して、私の保健師の志はより高まりました。以上のように大変実りの多い実習となりましたのは、ご協力・ご指導していただきました皆様のおかげです。本当にありがとうございました。





モニターツアーとしての「妙高メディカルグリーンツアー」

准教授 水口 陽子

メディカルグリーントーリズムは新潟県立看護大学看護研究交流センター事業として、地域の活性化、北陸新幹線(平成26年度開業予定)活用、看護大の地域貢献を目的として平成22年度から始めました。平成23年度は、健康チェック、健康改善・リフレッシュ、介護準備学習の各ツアーコースを計画し、モニターツアーを行いました。

今年度は、昨年度の評価をふまえて、健康改善・リフレッシュコースを改善しました。上越・妙高の自然資源を活用した癒しの運動、湯量豊富な温泉、地場野菜を使った調理を体験し、心身のリフレッシュを図るとともに、募集時から実施にかけて参加者の理解を得て、唾液アミラーゼ活性値の測定とPOMS(気分プロフィール検査)によるリラックス度の検証を目指すモニターツアーを企画しました。妙高市と提携し、新幹線まちづくり上越推進広域連携会議の協力と上越医師会の後援を得て、「妙高メディカルグリーンツアー」として2泊3日のコースで実施し、北名古屋市の皆さん26名の参加がありました。

1日目は温泉ソムリエ講話があり、参加者の皆さんは、楽しいお話に聞き入った後、ゆっくりと旅館の温泉を堪能していました(赤倉温泉宿泊)。2日目は、笹ヶ峰高原のさわやかな空気に触れながら、森林セラピー/ノルディックウォーキング(どちらかを選択)を楽しまれました。その後、燕温泉に移動し、

露天風呂等の入浴で汗を流しました。3日目は、上越野菜の料理体験でした。男性参加者は1名でしたが、はりきって調理に参加されていました。最後に上越市の岩の原葡萄園に移り、当日「収穫祭」のイベントがあり、にぎやかな雰囲気の中で、ワインの試飲やお土産購入等を楽しまれました。コース参加者には看護大教員が作成した健康的な生活(運動、食など)に関する小冊子がプレゼントされました。

この度のツアーの実施に当たっては、関係者の皆様から多大な御協力を頂きました。ここに記して感謝申し上げます。



笹ヶ峰高原でのノルディックウォーキング参加者

基礎ゼミナール3:情報処理技術を用いた基礎研究論

1年生 長 美羽

わたしの所属するゼミは「情報処理技術を用いた基礎研究」というゼミです。このゼミの特徴は活動の内容は幅が広い点なのではないかと思えます。12月までにパソコンの分解・組み立て、ワードソフトを用いた医療についてのレポート作成、サリドマイドについての論文の読解、はんだごてを用いたオルゴール作成などを行いました。どれも文字にしてみると難しそうで、とっつきにくく感じてしまうかもしれませんが、活動の際には先生の丁寧な解説があるので、知識のなさはまったく問題がありませんでした。

このゼミに入るきっかけとなったのは「パソコンの分解が経験できる」という点でした。他のメンバーにも同じ理由を持った人はいると思います。分解をすることでわかったことがいくつかありました。コストを削減し組み立て時間を短縮するために、外装などの大きな部品はネジを減らすようにできていることなどです。また、小さなパーツはそれぞれ違う国によってできていることを実際に表示を見ることができました。

また、反対にパソコンを組み立てる作業では、電子パーツの繊細さに苦戦しながらも無事に起動させることができました。専門的な知識の乏しい自分たちでも指導があればパソコンを作成できるとわかって感動しました。このゼミに入らなければ一生体験しなかったであろうことを経験できてよかったです。

夏休みの課題としては、2人1組で医療にかかわるテーマを決め、

ワードソフトを使ってレポートを作成しました。わたしのグループでは災害看護について調べました。高校でもワードソフトは使っていましたが、きちんとした使用方法を教わった上でのレポート作成はとてもやりやすかったです。この知識は必修科目の情報の授業や、今後の実習レポート、卒論作成にも必要となるはずで、前もってこのようなレポート作成の機会を得ることができてよかったと思います。

ゼミで経験したことは全部いい経験だったと思います。今後、大学生活の中だけでなく、卒業した後もゼミで培った知識を生かしていきたいです。



卒業研究



卒業研究に取り組んで

4年生 岡田 郁美

私は「ターミナルケアに携わった看護師ががん患者の死を通して得られる成長」というテーマで卒業研究に取り組んでいます。このテーマにしたきっかけは3年の領域別実習での出来事です。私は、ターミナル期にある患者さんを受け持たせてもらい、実習の中でその患者さんの死を経験しました。看護師の皆さんはその日も普段通り日々の業務をこなされていました。そこで、私は患者の死によって悲しみがある中で、どのように自身の成長につなげていっているのかということに興味を持ち、このテーマを研究していきたいと思いました。テーマが明確に決まるまでは時間を要し、何回かゼミの皆さんと検討して、自分が行いたい研究を明確にしていきました。

3年生の皆さんは領域別実習が終わったかと思うと、看護研究の授業が始まります。自分がどんなことを研究したいかという所が一番悩む所だと思います。私は今までの実習を振り返りつつ、いくつかの領域の先生に話を聞きに行き、どんなことをしたいかを明確にしていきました。なので、興味のある分野の先生に話しを聞きにいくと



左端が岡田さん

いいと思います。研究テーマを決定したら、4年の前期に研究計画書を作成していきます。自分が行う研究について今までどこまで明らかになっているのか、必要性はあるのかなどについて先行文献を用いて検討していきます。その後、研究に関する実習をして、データ収集をしていきました。9月からは得られたデータに基づき、質的に分析をしていきました。今は12月中旬の看護研究発表会に向けて、要旨をまとめている段階にあります。今後、発表会までに先生との面談やゼミを通して、研究をさらに深めていけるようがんばります。

よさこいサークル『蓮華団』活動紹介

2年生 高野 洋子

私たちよさこいサークル『蓮華団』のメンバーは、1～4年生合わせて34人おり、1・2年生が主体となって週に1回活動しています。

今年度は、子安新田・夏祭りをはじめ5つのイベントにてよさこいを披露させて頂きました。こちらから宣伝活動などは行わないので、地域の方々からのご依頼があって初めて私たちは人前で踊ることが出来ます。ですから毎回心から感謝し、精一杯踊らせて頂いています。また、よさこいを通じて地域の方々との交流が持てるのが、このサークルの一番の魅力だと思っています。

さて、11月3日に大学の一大イベント「桜蓮祭」が催されました。当日の演舞に向けて、私たちよさこいサークルも1ヶ月前から放課後の練習を開始していました。しかし、アルバイトや桜蓮祭に関する他の役割などで皆が忙しく、思うように練習が進められませんでした。1・2年生がペアで踊る曲もあったので、全員が集まれる昼休みにも練習をしました。皆、授業の合間で休みたかったり、昼食をゆっくり食べたいところを、文句を言わず集まってくれてありがたかったです。

一方、リーダーシップという言葉が本当に似合わない私には、周囲の助けが不可欠でした。普段の練習から、先輩に助けを求めてばかりの頼りないサークル長だったと思います。しかし、先輩や仲間、家族からの支えと励ましのおかげでやり抜くことができました。本番は、実習や国家試験の勉強で多忙な3・4年生も駆けつけて下さり、最高に楽しく踊ることができました。全ての

サークル紹介



演舞を終えた後の、仲間からの「本当に楽しかった!」「今までお疲れ様」「高野がサークル長でよかった」との言葉に涙が止まりませんでした。よさこいサークルのこのメンバーで踊ることができて、心から幸せだと感じました。

また、演舞の合間には、以前にイベントでよさこいを見て下さっていた方が「また元気をもらいに見に来たよ」と声をかけて下さったり、午前で帰る予定だった方が「とても良かったから午後も見に来ます」と言って下さる方もいました。人とのつながりとよさこいが人に与える力を実感しました。

来年度も、新たな1・2年生が主体となり、よさこいを通して皆さんに元気を与えられるような良い交流の場を作っていきたいと思っています。最後に、今年度私たちよさこいサークルに関わって下さった皆さま、本当にありがとうございました。





上越市役所
三和区総合事務所 保健師 小林 奈緒子

私は新潟県立看護大学の前身である、新潟県立看護短期大学の1期生で入学しました。看護学科卒業後、保健師を目指し地域看護学専攻科で学び、上越市役所に入庁しました。現在は三和区総合事務所に勤務しています。

保健師として採用されてから14年目を迎えますが、公衆衛生を取り巻く状況はめまぐるしく変化し、入庁当時と業務内容も異なっています。変化の一つに医療制度改革があります。保健活動の大きな転換期にあたり「住民の健康を守るための十分な実践ができていますか。」また「10年目という中堅期に入り、惰性的な活動になっていないか。」と不安を感じ始めていました。その時、新潟県立看護大学大学院看護学研究科看護学専攻（修士課程）が開設されたことから、様々な事象を知りたい、聞きたい、深く学びたいと思い入学しました。

働きながら大学院で学ぶことは想像した以上に困難で、夜間・土日に集中講義を実施するなど大学の環境と、職場のサポートがなくて

先輩保健師の方々と(中央が小林さん)



は修了が難しかったと思います。専門看護師教育過程では、実践を理論に照らし合わせる実習を行い“実践を理論と結び付けることは保健活動の対象・現象への理解を深めることであり、複雑な問題を持つ患者や家族への高度なケア提供につながる”といった事など、より看護学を探究することができました。

そして平成24年度の専門看護師認定審査に無事合格することもできました。認定審査にむけた受験準備では、大学教授をはじめ多くの方から十分なサポートを受けることができ、大変感謝しております。

まだ諸先輩方の実践には及ばない所が多いですが、地域住民の健康を守るという重大な使命を持つ保健師活動を地道に実践していきたいと思います。より卓越した看護実践を行うことを目指し、これからは新たなスタートであると感じ、今後も自己研鑽に励みたいと考えます。

助産事故を経験した助産契約当事者間の信頼関係形成過程に関する質的研究

臨床看護学領域 助産学 講師 高島 葉子

私は平成22年度から文部科学省の科学研究費 基盤研究(C)の助成を受けて、助産事故を経験した助産契約の当事者間(助産所管理者である助産師と妊産婦の間)の信頼関係が事故を契機としてどのように形成されていくのか、その過程について研究しています。

私がこの研究に取り組むきっかけとなったのは法学部の学士・修士課程に在籍中に周産期事故について判例研究したことにあります。判例の中には開業助産師自身が被告となっている事件もありました。私の認識の中では、助産所での分娩を希望する妊婦は、助産師に「安全と快適性」に基づいた継続的で個別的なケアを求め、助産師はその妊婦の思いに誠実に対応していたはずでした。健やかな児の誕生を共通の目的として共働し、信頼関係を構築していたはずの当事者が裁判という場で激しく闘っている現実には衝撃を受けました。事故前後のプロセスで、助産師と妊産婦との信頼関係はどのように変化していったのか明らかにしたいと思いました。そのために、助産事故があっても妊産婦との関係性を維持している助産師と妊産婦に面接調査をしました。また、比較検討するために、訴訟に至った妊産婦も対象にしました。対象数は心理的に負担感の強い内容であり予定より少なくなりましたが、貴重なデータを得ることができました。



結果の概略ですが、関係性を維持している例では、事故発生時の誠実な対応により信頼関係の多少の揺らぎはあったものの、妊娠期に培ってきた信頼関係をより発展させていました。紛争に至った例では、妊婦健診を通して培っていた信頼関係は、事故前から契約をめぐる認識のずれが起こり、事故やその時の対応から信頼関係が崩壊してしまいました。もう一方の当事者である助産師は対象との関係性は維持しているものの、他の妊産婦のケアも同時進行で行わなければならないはず、心理的に追い詰められた中で、懸命に対応していました。

助産所運営は厳しい現状に立たされていますが、助産師が自立・自律した仕事をしていくためには、女性たちおよび家族との信頼関係が不可欠です。不可避に事故にみまわれることはあるということを戒めるとともに、適切な対応をどのようにしていく必要があるのか、何が適切な対応を阻害しているのかなども探っていきたいと考えています。

